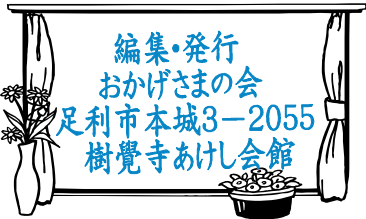


おかげさま



とき えいろく
時に、永禄3年5月19日（1560年6月12日）。

きょじょうきよすじょう おだのぶなが こうわかまい あつもり
居城清州城にいた織田信長は、幸若舞「敦盛」

ま しゅつじん みじたく とどの
を舞った後に出陣の身支度を整えると、明け方

あつた
午前4時頃に城を出発。8時頃、熱田神社に到着。

ぐんせい けっしゅう せんしょうきがん
その後軍勢を集結させて熱田神宮に戦勝祈願を

行った。と『信長公記』には記されています。この時、というか信長が好

いで舞ったのが「敦盛」の一節、《人間五十年、下天のうちを比ぶれば、

ゆめまぼろし ごと ひどたびしょう う めつ
夢幻の如くなり。一度生を享け、滅せぬもののあるべきか》。



信長は、当時、流行っていた猿楽より曲舞を好んだようです。曲舞とは、

うたい つづみ おおぎ はやし
謡と鼓の伴奏に合せて、扇を持って舞う。猿楽の流れとしての舞は、囃子

じゅうた ともな まいばやし しまい しらびょうし
と地謡を伴う舞囃子と囃子を伴わない仕舞に分かれます。白拍子などの影

響をより強く受けた仕舞より、男っぽい曲舞を好んだのかな？



「敦盛」とは、熊谷直実と平敦盛の物語

いちのたに
です。源平一の谷の合戦の時、直実と敦盛

いっきう
の一騎打ち、そして直実に討ち取られたの

じゃっかん むな
が弱冠十六歳の敦盛。直実は、武士に虚し

しゅっけ ほうりきほうれんしょう な
さを感じ、後に出家し、法力房蓮生と名乗っ

ています。。

熊谷直実というと思いだすことがあります。会合に遅刻して行くと、

にゅうどう
「熊谷直実入道をなされているのですか？」と声を掛けられる。そこで私

が「法力、もるべからず」と答える。これにはあるエピソードがあります。

仏具磨き
8月12日午前9時より
樹覚寺本堂
多くの方のお手伝いを
お待ちしております。



**仏仕・仏婦合同
物故者追悼法要**
8月8日午後1時30分
樹覚寺本堂

親鸞聖人が、法然聖人の吉水の草庵にいたとき、一緒にいたんですね。

「御伝鈔 (親鸞聖人の伝記) 」の上巻六段(信行兩座)の一部です。

大師聖人 (源空) のたまはく、「この条もつともしかるべし、すなはち明日

人々来臨のとき仰せられ出すべし」と。しかるに翌日集會のところに、上人 [親鸞] のたまはく、「今日は信不退・行不退の御座を両方にわかたるべきなり、



いづれの座につきたまふべしとも、おのおの示したまへ」と。そのとき三百余人の門侶みなその意を得ざる気あり。ときに法印大和尚位聖覚、ならびに釈信空上人法蓮、「信不退の御座に着くべし」と云々。つぎに沙弥法力 [熊谷直実入道] 遅参して申していはく、「善信御房の御執筆なにごとぞや」と。善信上人のたまはく、「信不退・行不退の座をわけらるるなり」と。法力房申していはく、「しからば法力もるべからず、信不退の座にまゐるべし」と云々。

法力房も、法然さま親鸞さまと同じ信不退の座に連なったので、書き添えている。

さて、信長が舞った「敦盛」の一節、《人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり/一度生を享け、滅せぬもののあるべきか》はよく知られています。信長という人物の、「武士の覚悟」ととらえる人もいます。出だしの言葉「人間五十年」を「人間五十年) 」と読み替えて、人生50年と捉え、命を惜しむより名を惜しめ、などと解説する。

しかし、一番大事なことを最後に書く例もあります。お釈迦さまの誕生偈、「天上天下/唯我独尊/三界皆苦/吾当安之」、三界は皆苦なり吾まさに之を安んずべし、苦を安んずるために生まれてきた、と。

《人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり/一度生を享け、滅せぬもののあるべきか/これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ》、菩提の種と知り菩提を求めないことは残念だ。菩提を求めなさいよ、と言わんとしているのです。菩提を求めなさいと言うことは、お念仏とともに人生を歩めということ。往生浄土の歩みを勧めているのです。

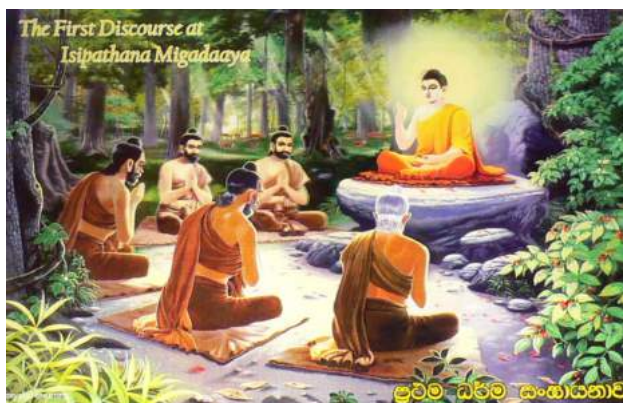
あけし酔話

お釈迦様の生涯

《初転法輪》

「自分の都合でしか物事を見られない(愚癡)ので、少し思い通りになると、さらに欲(貪欲)をおこし、思い通りにならないと怒りの心(瞋恚)で、他を責めることから抜け出せない人々には、自分のさとりの内容を理解しえないであろう」。

そのように思われたお釈迦さまは、さとりを開かれた後も数週間、菩提樹下に坐し、繰り返しさとりの内容を味わい、ひとり楽しんでおられました。



仏伝には、梵天(ブラフマー=宇宙の根本原理であるブラフマンが、神格化されたもの)が現れ、人びとの中には釈尊の教えを理解し、さとりを得る者もいるはずだから、一人で楽しんでいるのではなく、その尊いさとりを、解脱への道を、お説きくださいと懇願した、とあります。これが「梵天勧請」の伝説です。

ともあれ、お釈迦さまは菩提樹下を立たれ、教えを伝えようと決心されました。しかし、かつて師事した、アーラーラ・カーラマ仙人も、ウツダカ・ラーマプッタ仙人も、すでにこの世にはなく、かつてともに苦行をした五人の修行者に伝えようと、ブツダガヤーを後にし、彼らのいるベナレスへ向けて旅立ちました。

現在のベナレスは、ヒンドゥー教の聖地で、各地より毎日数え切れない巡礼者が訪れています。お釈迦さまの時代もベナレスは宗教都市で、多くのバラモンや修行者が集まっていました。

ベナレスより北へ十キロほど行くと、サールナートがあります。ここは当時、鹿の園(鹿野苑・ミガダーヤ)と呼ばれ、仙人の集まる場所とも呼ばれていました。

五人の修行者もこの地にいたのですが、「途中で苦行を止めたゴータマ(お釈迦さまの姓)とは、口をきくまい」と約束をしていました。

ところがお釈迦さまが前に立つと、その威厳に満ちた姿、慈愛あふれる様子に、我先にとひざまずき、教えを乞うのでした。

この時に説かれたのが、「中道」の教えでした。琴は弦がゆるいと音は出ないし、張りすぎると切れてしまう。いい音はゆるすぎず、張りすぎない弦でなければ、奏でられない。同じように、人びとは両極端に陥っている。ある人は快樂を追い求め、ある人は厳しい修行に身を委ねている。しかし、この両者はいずれもさとりに至ることはできない。苦と楽との両極端を捨て、禅定によって叡智を完成し、無明を滅してこそ、涅槃に達することができる、という教えだったのです。

そして、その具体的な方法は、もののありようを正しく見るという「正見」を基本とする八正道によると説いたのです。五人はたちどころに帰依し、仏弟子となりました。

ここに初めて、仏・法・僧の三宝が揃い、仏教教団が誕生しました。

(続く)



あけし あれこれ

かたつむり (蝸牛)

梅雨というよりは夏到来ですね。最近、見かけないなと思うのですが、「でんでんむしむし、カタツムリ……」以前は6月に入るとあちこちにいたものですが、なかなか見られなくなりました。環境の変化についていけなくなってしまったかなとも思いました。そこでちょっと調べてみました。

カタツムリはデリケートな生き物なんですね。寒さに弱く、暑さも苦手、冬は冬眠、夏も落ち葉の積もった下や日の入らないところで夏眠なのだそうです。



「カタツムリ」という語は日常語であって特定の分類群を指してはおらず、生物学的な分類では多くの科にまたがるため厳密な定義はない。陸貝(陸に生息する腹足類)のうち、殻を持つものを「カタツムリ」「デンデンムシ」などと呼ぶとのこと。

頭にある長い方の角は目、見えるわけではなく、明暗が判断できる程度、短い方は匂いや味を感じる触覚。殻はカルシウム分を沢山とって大きくし、汚れたら殻の筋に沿わせて綺麗に流しているとのこと。そして歯があって、歯舌と呼ばれるおろし金のようなギザギザしたごく小さなものです。一列に80本あり、それが150列も並んでいますので、そのギザギザは1万2千にもなります。この歯舌は、葉をすりつぶすというよりも、コンクリートなどを削るために使われます。ビックリです。

殻は大半、95%は右巻き、左巻きのものもわずかですが、存在しています。そして梅雨の頃になると見えるので、水が好きなのかと思っていたが、実は水は苦手なために葉の上などに退避しているのだそうです。調べれば調べるほど、カタツムリは面白い、不思議な生き物です。

